

ずいそう

## 映画と共に過ごしたある一時期

諸橋 通夫



戦後世界の映画界は、いろいろな観方はあるのでしょ  
うが多く傑作を生んできた。ヨーロッパではルキノ・  
ヴィスコンテ「山猫」、アンドレ・カイヤット「ライ  
ンの仮橋」「シンデレラの罠」「先生」、イングマール・  
ベルイマン「ペルソナ」、フランソワ・トリフォー  
「突然炎のごとく」「柔らかな肌」、アンジェイ・ワイ  
ダ「灰とダイヤモンド」、ジュールス・ダッシン「死  
んでもいい」、フレッド・ジンネマン「日曜日には鼠  
を殺せ」、アンリ・コルピ「かくも長き不在」などが  
あり、数え上げればきりが無いのですが、その中でも  
忘れられない映画として大きな衝撃を受けて私の中に  
残っている作品にアンジェイ・ムクの「パサジェル  
カ」とロマン・ポランスキーの「水の中のナイフ」が  
ある（どちらも監督はポーランド人）。

これらの作品はハリウッドの社会派映画のように、  
具体的な政治をその背後に密着させて描くというこ  
とではなく、人間の変わりえない部分を見直して行く中  
で、個人の生きる方向性の問題として人間とは何かを  
政治と対比させて描いているところに、ハリウッド映  
画と違うものを掘み取ろうとしているように思えるの  
です。

現実社会の中で、生きる方向性や方法論を考えてき  
たのがハリウッド映画の面白さでありました。一方ポー  
ランド映画は、おかれた状況の中で人間としての生き  
方を考え、それを個人の生活に還元しようとしている  
ところですが、何故このような違いが生じるのかと申し  
ますと、ポーランドという国の地域一帯が「ハートラ  
ンド」と呼ばれ、地政学的に非常に重要な位置にある  
ことです。それゆえ権力者（世界を統一した権力者は  
必ずこの地域を征服している）によって歴史上幾度も  
分割・統合され、明確な自分達の国境というものが一  
定でなかったこと。その為に多民族が入り組んでいて  
統一した考えや政治姿勢を持てなかったことによって、  
彼等ポーランド人はイデオロギーや社会のあり方以上  
に、人の心の本質部分を掘みながら、自らの生き方の  
問題に帰着させてゆくより仕方がなかったように思わ  
れます。「灰とダイヤモンド」のアンジェイ・ワイダ  
（ポーランド人）もテロや戦争批判だけを行ったので  
はなかったと思います。コミュニストの暗殺を狙うテ  
ロリストのところへ「(ナチの降参によって) 長い戦

争が終わった。やっとポーランドにも平和がやって来  
る」と言ってワインを持ってきた宿屋の爺さんを描く  
一方で、酒の入った一人の軍人に無言のままポーラ  
ンド国旗を握らせ、ポーランドの平和に一抹の疑問を投  
げかけることを忘れなかったように、彼等は自分達で  
勝ち取った真の平和や自由でなかったことを痛感して  
いるのではないのでしょうか。

アンジェイ・ムクの遺作「パサジェルカ」はナチ  
の犯罪や残虐性を訴えるものでもなければ高度の政治  
を描こうとしたものでもない。看守（リザ）と囚人  
（マルタ）の戦いを通して見つめたナチズムと民主主  
義との戦い。二つの時代における二人の女性を対比す  
ることで、女性の本質を通して人間の一面を描いた  
作品である。映画はリザの眼を通した回想形式で進め  
られて行き、アウシュビッツで看守と囚人の関係であ  
った二人の女旅客者が、戦後数年たった平和な時代に豪  
華客船の中で偶然出会うところから始まる。最初の回  
想では社会や妻の過去を知らない夫から自分を守るた  
めに赤裸々な嘘で固められた自己弁護が行われている  
（省略）。二回目に自分自身の心の中で語られる回  
想によってリザはマルタに対して行った行為の裏側を  
徐々に解きほぐして行く（省略）。

最期にラストシーンのナレーションでこの映画を締  
めくくっています。

「一時的な孤島であるこの豪華客船上の物語を  
終えることはたやすい。過去との出会いは長続き  
しないから——。この女マルタは、ことによつた  
ら昔の女囚人マルタに似ていただけの“パサジェ  
ルカ（女旅客者）”にすぎないかも知れない。船  
は先に進んで行きこの二人の女はもう二度と会う  
ことはないだろう。まして、アウシュビッツのぬ  
かるみは、リザの顔に告発状を投げつけるために  
忘却の中から立ち上がることはもうあるまい。昨  
日の犯罪に対して無関心な人々の間に居るリザの  
今日の幸福は満たされることが無いだろう。その  
様な人達は今日もまた……。果たして本当にそう  
だろうか？」